江無滯可漕渡事、

附川之渡舟、乘合大勢込乘由候故、船危儀共有之段、内々令承知候、如前條乘合之人數、少可乘之事、

右之條々、宿々問屋年寄令承知、此紙面寫留メ、問屋場に張置、堅可相守候、若於致違背は、後日ニ相聞といふとも、可爲曲事者也、

十一月

〔徳川禁令考五十一　庶民〕京師

新式目

一川船渡守之事、毎年役目相定者、公儀之使者、飛脚、傳馬之外者、雖爲武士、渡賃可取之、或從公儀急用之時、緩ニ仕候歟、或は以見懸渡賃多取候者、曲事可申付、總而斗藪行脚、乞食體之者には、從往古不及渡賃、間其心得肝要也、亦洪水之節、不叶用所有之而、道急用之衆者、對渡守相當之心持尤之事、

〔東海道名所記三〕舞坂より荒堰まで舟の上廿三町

舟賃は、一艘の借切百卅文、尾州紀州の衆には、一艘のかり切百文、乘あひは一人は四錢、のりかけは人ともに十五錢、一駄荷は廿二錢なり、

〔享保集成絲綸錄二十二〕元祿三午年六月

覺

一荒井今切渡借切船之義は、只今迄百四拾文取來候、此上江此度四拾貳文增之、百八拾貳文可取之、若右之外增錢取もの於有之は、雖後日相聞、急度可爲曲事者也、

元祿三庚午年六月三日　傳左衞門